ハマル語の音素とアクセント

高橋　洋成
（筑波大学）
s025035@ipe.tsukuba.ac.jp

0　はじめに

本稿は、エチオピア南西部、スーダンとケニヤとの国境に近いオモ川沿いの地域で使用されている言語の一つ、ハマル語に関する調査報告である。調査によって得られた語彙に基づき、ハマル語における音素目録の作成を目指す。

1　調査について

本稿は、2006 年 2 月 17 日から 3 月 6 日にかけて、エチオピアのアジス・アベバにおいて収集した言語データに基づく。この調査では、ハマル族の出身であり、現在アジス・アベバ大学に在籍中の Bazo Morfa 氏に協力して頂いた[1]。あらかじめ作成した語彙調査票に基づき、ハマル語の語彙を収集するとともに、実際の発音を録音した。

2　ハマル語の母音とアクセント

2.1　先行研究における 2 つの母音カテゴリとは

ハマル語の母音体系については、Lydall (1976) が詳細な報告をしている[2]。それによると、ハマル語の母音としては 10 種類が確認でき、ɩ、ʊ、ɛ、ɔ、ʌ と i、u、e、o、a の 2 つのカテゴリに分けられるという。

前者のグループ、すなわちカテゴリ I に属する母音の特徴は “open, unraised” であるという。また、この母音の発音には咽頭の狭めを伴い、緊張した音になる。それゆえ、カテゴリ I の母音が強く発音される場合には、直前にかすかな声門閉鎖音が聞こえることもある。

---

[1]Bazo 氏は、エチオピア南西部のディメカから南西に約 8km に位置するハマル族の村ゾガラの出身であり、ディメカおよびジンカで教育を受けている。本調査における氏の協力に心より感謝を申し上げる。

[2]以下の記述では、Lydall の表記をそのまま用いている。

後者のグループ、すなわちカテゴリ II に属する母音の特徴は “（a を除いて）open, raised” である。このグループに属する母音は、カテゴリ I に比べて基本母音に近い。また、咽頭の狭めを伴わず、場合によっては呼気があたかも摩擦音のように聞こえるという。

この 2 つの母音カテゴリは、母音調和的な性質を持つ。すなわち、一つの語に現れる母音は皆、同一のカテゴリに属する傾向がある。また、語形成において異なるカテゴリの母音が同一語中に生じた場合、カテゴリ I の母音が、対応するカテゴリ II の母音に変化することで、母音カテゴリの同一性を保とうとする。

2.2 先行研究における母音の長さとは

Lydall は、母音の長さに影響を及ぼす要因として、母音カテゴリ・ストレス・母音結合の 3 種類を挙げている。

第 1 に、カテゴリ I の母音はカテゴリ II の母音よりも短い。これはカテゴリ I の母音に咽頭の狭めを伴うため、持続時間が限られるためである。

第 2 に、ストレスを持つ音節は、ストレスを持たない音節よりもわずかに長い。このことは、語形成要素の付加によって、新たにストレスを置かれた音節の母音が若干長くなることで確認できるという。

第 3 に、2 つの母音が隣り合う場合、すなわち、二重母音化・母音融合・母音脱落などの現象が生じた場合、これらの母音のモーラ的な長さは、それぞれが単独で発声された場合の長さの合計よりも短い。つまり、二重母音の長さは、期待される長さよりも短い。

これらはあらかじめ予測可能な要因である。つまり、母音の長さは意味の弁別には関与しない。

2.3 先行研究における語アクセントとは

Lydall によれば、名詞におけるストレスの位置と、動詞・形容詞におけるストレスの位置は異なる。名詞の場合、限定形のストレスは最終音節に、総称形のストレスは全音節に等しく置かれる。一方、動詞・形容詞の場合は、ストレスは必ず語頭音節に置かれる。これらの現象は、動詞・形容詞から派生した名詞との比較で明らかであるという。

2.4 調査結果に基づく母音の音色と長さ

以上の先行研究を踏まえ、以下に本調査におけるデータを提示する。以下の表では、L. の行が Lydall の先行研究からのデータ[3]、T. の行が本調査で収集し

[3]Lydall (1976: 399-400) からの引用であり、表記もそのまま用いている。

たデータ[4]である。

	「子牛」	「オスの子牛」	「子牛と共に」
L.	ɔnɔ	ota	ɔnɔkʌ
T.	[ʔoːtʰó]	[ʔoːtʰá]	[ʔoːtʰóxa]

	「家」	「小さな家」	「家と共に」
L.	ono	ona	onoʌa
T.	[ʔoːnó]	[ʔoːnó lika]	[ʔoːnóxa]

	「走る」	「走るべき人」	「もし走ったら」
L.	gɔbʌ	gobono	gɔbʌnʌ
T.	[goba]	[gobóno]	[gobánna]

	「着飾る」	「着飾った人」	「もし着飾ったら」
L.	goba	gobono	gobana
T.	[góːbá]	[goːbóno]	[goːbánna]

	「1」	「その 1 つ」	「1 つの」
L.	kʌlʌ	kalan	kʌlʌsʌ
T.	[kála]	[kálan]	[kálasa]

	「去る」	「去った人」	「去った人の」
L.	kala	kalan	kalaasa
T.	[gárá]	[gárâ]	[gáráːsa]

	「未認知の子」	「その未認知の子」	「未認知の子と共に」
L.	wʊtʌ	wutaa	wutʌkʌ
T.	[wútá]	[wútâ]	[wutáxa]

	「尖らせる」	「尖らせた人」	「尖らせたとき」
L.	wuta	wutaa	wutaxa
T.	[wúttá]	[wúttâ]	[wuttaɗá]

[4]IPA に準じた表記にしている。

	「残る」	「残った人」	「残らなかった」
L.	šɪdʌ	šidono	šɪdɪmʌ
T.	[ʃɪďá]	[ʃɪďóno]	[ʃɪďíma]

	「洗われる」	「洗われるべき人」	「洗われなかった」
L.	šida	šidono	šidima
T.	[ʃiːďá]	[ʃiːďóno]	[ʃiːďíma]

先行研究が母音カテゴリの証拠として提示したミニマルペアは、本調査においては子音の違い（[ʔoːtʰó]–[ʔoːnó]）、母音の長さの違い（[Sidá]–[Siːdá]）、子音の長さの違い（[wútá]–[wúttá]）などに還元されている。母音の音色の違い、あるいは喉の狭めの有無など[5]、母音カテゴリの証拠となるものを見つけることはできなかった。

一方、母音の長さに関しては、[ʃɪďá]–[ʃiːďá]、あるいは、完全なミニマルペアではないものの [goba]–[góːbá] のような例も見つかる。したがって、母音の長さは音韻論的な意味を持つと考えられる[6]。

二重母音は、基本語彙中に確認することができず、語形成における母音接辞の付加によってのみ生じうると思われる。その際、2.3 で先行研究が述べているように、二重母音の持続時間長は短母音と同じ、もしくはそれよりも短いように思われる[7]。二重母音には曲アクセント（â）が置かれうる。

以上の結果から、本稿ではハマル語の母音音素として /i/、/e/、/a/、/o/、/u/ の 5 種類を立て、それぞれ長短の区別があると結論する。

2.5　調査結果に基づく語アクセント

語アクセントは、先行研究（2.3）が述べるような予測可能なものではなく、語彙的に決定される予測不可能なものであることが、上述のデータによって明らかである。

ハマル語は高さアクセント体系と考えられる。また、次のような例も得た。

---

[5]カテゴリ I の特徴とされた喉の狭めに関しては、前後の子音の影響の方が強いように思われる。例えば、[ʃɪďá] と [ʃiːďá] における [i] は、どちらも喉の緊張を伴う音であり、おそらく入破音の ď の影響だと考えられる。同様に、放出音 [q'] の前後や声門摩擦音 [ɦ] の後ろの母音は、喉の緊張を伴っているように聞こえる。

[6]ただし、2.2 で触れたように、母音カテゴリを特徴付ける要素には、副次的とは言え母音の長さも含まれる。また、長母音に後続する母音は、わずかではあるが長くなる傾向があるように思われるので、現時点では母音カテゴリの存在を完全に否定することはできない。この点について今後、音響音声学的な分析が必要である。

[7]今後、音響分析を行う予定である。

「蜂」	[ʔánqásí]	cf. 「多くの蜂」[ʔánqásíno]
「子ヤギ」	[ʔanqasi]	cf. 「多くの子ヤギ」[ʔanqana]

「蜂」[ʔánqásí] は全体的に高トーンであるのに対し、「子ヤギ」[ʔanqasi] は前者に比べれば低トーンである[8]。高低 2 つの対立であれば、どちらか一方を高く発音するか、もしくは低く発音すれば事足りる。それゆえ、本稿では相対的に高い方を [á] [í] のように記述した[9]。

3 ハマル語の子音

3.1 両唇音

両唇音に関する音素としては、/p/、/b/、/m/、w、6 を立てることができる。

/p/ は通常有気音 [pʰ] であり、しばしば長母音の後で破擦音もしくは摩擦音と交代する[10]。

以下は破擦音・摩擦音と交代しない例である。

「糸」	/puddo/	[pʰuddo]
「舌」	/ʔatap/	[ʔatapˀ]
「ナタ」	/ɲápaŋá/	[ɲápʰaŋá]
「服」	/ʔapála/	[ʔapʰála]
「月」	/ʔárpʰí/	[ʔárpʰí]
「ナイフ」	/ʔalpá/	[ʔalpʰá]
「脂」	/durpi/	[durpʰi]

以下は破擦音・摩擦音と交代している例である。

「口」	/ʔá:pí/	[ʔá:p͡fí] ～ [ʔá:ɸí] ～ [ʔá:fí]
「骨」	/le:pí/	[le:p͡fí] ～ [le:ɸí] ～ [le:fí]
「泣く」	/ʔe:pa/	[ʔe:p͡fa]

以下は有声閉鎖音 /b/ を有する語の例である。

---

[8]通常よりも「抑えた」発音にも聞こえるので、[ʔànqàsì] と表記すべきかもしれない。

[9]だが、もしかすると低トーン [à] [ì] を加え、低・中・高のトーンレベルを考えるべきかもしれない。特に語形成において、「翼」[kaɸana] → [kàɸanano] のように、語頭音節のピッチを低くする（相対的にそれ以降の音節のピッチを高くする）ような現象が見られる。この点についてはさらなる調査を要する。

[10]この点について、Lydall はカテゴリ II に属する母音に隣接するときにしばしば摩擦音化すると述べている。

「髭」	/buːʃí/	[buːʃí]
「尾」	/dubáná/	[dubáná]
「眉」	/gombé/	[gombé]

以下は鼻音 /m/ を有する語の例である。

「あご」	/moːʃ/	[moːʃ]
「友人」	/ʔaːnámó/	[ʔaːnámó]

以下は接近音 /w/ を有する語の例である。

「額」	/woti/	[wot^{h}i]
「全て」	/wul/	[wul]
「森」	/q'awó/	[q'awó]

以下は入破音 /ɓ/ を有する語の例である。

「肝」	/ɓulta/	[ɓult^{h}a]
「血」	/zomɓí/	[zomɓí]

3.2 歯音

歯音に関する音素としては、/t/、/d/、/n/、/r/、/s/、/z/、/l/、/ɗ/ を立てることができる。

/t/ は強い有気音[11]で、摩擦音化することはない。

「今」	/taːki/	[t^{h}aːki]
「頭」	/mete/	[met^{h}e]

以下は有声閉鎖音 /d/ を有する語の例である。

「尾」	/dubáná/	[dubáná]
「胸」	/sadá/	[sadá]

ただし、[d] は [z] と交代することがある。以下の語は比較的自由に交代する例である。

「畑」	/déle/	[déle] ～ [zéle]

以下は鼻音 /n/ を有する語の例である。

[11] しばしば放出音 [t'] にもなる。

「蟻」	/náŋŋo/	[náŋŋo]
「友人」	/ʔaːnámó/	[ʔaːnámó]

震え音は /r/ は、通常の発話速度では弾き音 [ɾ] である。

「扉」	/keri/	[keri] ~ [keɾi]
「たくさんの扉」	/kerro/	[kerro]

以下に摩擦音 /s/、/z/ を有する語の例を挙げる。

「毛」	/síːtí/	[síːtʰí]
「匂い」	/gansa/	[gansa] ~ [gas̃sa]
「肌」	/zara/	[zara]
「矢」	/ɦaːza/	[ɦaːza]

側面音 /l/ は、長母音の後ろで摩擦音化する。

「肩」	/gélí/	[gélí]
「脚（膝から足首まで）」	/zoːlí/	[zoːɬí]
「粉」	/ɗíːlí/	[ɗíːɬí]

以下は入破音 /ɗ/ を有する語の例である。

「尻」	/tuɗí/	[tʰuɗí]
「多くの食べ物」	/ɓanɗa/	[ɓanɗa]

3.3 後部歯茎音

後部歯茎音に関する音素としては、/ʃ/、/t͡ʃ'/、/d͡ʒ/ を立てることができる[12]。以下は摩擦音 /ʃ/ を有する語の例である。

「草」	/ʃudí/	[ʃudí]
「肌」	/biʃi/	[biʃi]

放出音 /t͡ʃ'/ は、放出の度合いが弱くなり [t͡ʃ] で実現することもある。

「刃」	/t͡ʃ'árí/	[t͡ʃ'árí]
「頬」	/kártʃ'a/	[kárt͡ʃ'a] ~ [kárt͡ʃa]
「根」	/t͡ʃ'aːt͡ʃ'í/	[t͡ʃ'aːt͡ʃ'í]

以下は破擦音 /d͡ʒ/ を有する語の例である。

[12]Lydall の子音目録では /t͡ʃ'/ は ts であり、/d͡ʒ/ に対応するものはない。

「息子」	/d͡ʒalɗabá/	[d͡ʒalɗabá]
「半分以下」	/d͡ʒɔːgí/	[d͡ʒɔːgí]
「傷」	/ʔad͡ʒímí/	[ʔad͡ʒímí]

3.4 硬口蓋音

硬口蓋音に関する音素としては、/ɲ/、/j/ を立てることができる。

以下は鼻音 /ɲ/ を有する語の例である。ただし、現調査段階ではこの 1 例しか見つかっていない。

「ナタ」	/ɲápaŋá/	[ɲápaŋá]

以下は接近音 /j/ を有する語の例である。

「川」	/bajtí/	[bajtí]
「親指」	/ʔántá dúmaja/	[ʔántá dúmaja]
「物」	/jér/	[jér]
「地面」	/péj/	[pʰéj]

3.5 軟口蓋音

軟口蓋音に関する音素としては、/k/、/g/、/ŋ/、/x/ を立てる[13]。

/k/ は、/p/, /t/ に比べると有気の度合いは少ない。

「腰」	/karna/	[karna]
「氷」	/ʃékíní/	[ʃékíní]
「牝牛」	/waːkí/	[waːkí]
「塵」	/turké/	[turké]

/p/ と同様、/k/ も摩擦音と交代する可能性がある。しかし、[k] → [x] となる環境は必ずしも自明ではない。Lydall は、/k/, /p/ はカテゴリ II に属する母音に隣接するときにしばしば摩擦音化すると述べているが、例えば「水」を表す語 [nǫqǫxá] は、カテゴリ I に相当する母音 [ǀʻo] を有しているにもかかわらず、/k/ が摩擦音化する[14]。[x] が [k] の異音であるとは必ずしも言えないため、/x/ という音素を立てておく。

[13]Lydall は軟口蓋入破音 /ɠ/ を認め、例として「鞭」ɠaʔa を挙げている。しかし、今回の調査における「鞭」は /d͡ʒuga/ であり、他の語彙からも /ɠ/ の存在を確認できなかった。調査協力者は、ハマル語に [ɠ] を含む語はないと述べている。

[14]さらに、調査協力者によれば、[nǫqǫxá] を [nǫqǫká] と発音することは決してない。

「水」	/noqoxá/	[nǫqǫxá]
「明日」	/saxá/	[saxá]
「牡ヤギと共に」	/q'ultaxa/	[q'ult^{h}axa]

以下は有声閉鎖音 /g/ を有する語の例である。

「眉」	/gombé/	[gombé]
「弓」	/magála/	[magála]

以下は鼻音 /ŋ/ を有する語の例である。/ŋ/ が語頭に来る例は、現時点では見つかっていない。

「ナタ」	/ɲápaŋá/	[ɲápaŋá]
「蟻」	/náŋŋo/	[náŋŋo]

3.6 口蓋垂音

口蓋垂音に関する音素としては、/q/、/q'/ を立てることができる。

無声閉鎖音 /q/ は語中で頻繁に [χ] になる。

「角」	/qúʃúɓá/	[qúʃúɓá]
「バター」	/waqati/	[waqat^{h}i] ~ [waχat^{h}i]

放出音 [q'] は、軟口蓋 [k'] 付近から口蓋垂 [q'] までの広い範囲で調音されうる。また、語中ではしばしば摩擦音化して [ɢ] になる。

「耳」	/q'a:mi/	[q'a:mi] ~ [k'a:mi]
「膝頭」	/bóq'o/	/bóq'o/ ~ [bóɢo]

3.7 声門音

声門音に関する音素としては、/ʔ/、/h/、/ɦ/ を立てることができる[15]。

声門閉鎖音 /ʔ/ は、語頭・語中・語末に出現しうる。

「どこ」	/ʔamúti/	[ʔamúti]
「年」	/leʔe/	[leʔe]
「行く」	/jeʔe/	[jeʔe]
「終わった」	/peʔ/	[pe̯ʔ]

声門摩擦音として、無声の [h] と有声の [ɦ] の両方を確認できる。有声の [ɦ]

[15] /ɦ/ は Lydall の子音目録にはない。

の出現は語頭のみであるが、[h] あるいは [ʔ] と相補分布をなすわけでもない[16]。したがって、/ɦ/ を独立した音素として考えておく。

「木」	/haqa/	[haqa] ~ [haχa]
「切った」	/taha/	[taha]
「いつ」	/ɦaː/	[ɦaː]
「誰」	/ɦajni/	[ɦajni]
「いくら」	/ɦamáɗa/	[ɦamáɗa]

3.8 子音音素目録

以上より、ハマル語の子音音素目録を以下にまとめる。

	唇音		歯音・歯茎音			硬口蓋音		軟口蓋音		口蓋垂音	声門音	
閉鎖音	p	b	t	d				k	g	q	ʔ	
鼻音		m		n			ɲ		ŋ			
震え音			r									
摩擦音			s	z	ʃ			x			h	ɦ
側面音				l								
接近音		w					j					
破擦音						d͡ʒ						
放出音					t͡ʃ'					q'		
入破音		ɓ		ɗ								

4 まとめ

本稿では、現地で得られた語彙データを Lydall (1976) による先行研究と対照させつつ、音素およびアクセントの同定を行った。その結果、先行研究とは大きく異なる音素体系を得るに至った[17]。

なぜこれほど異なる音素体系となったのか。第一に、個人差の可能性が考えられる。それを確認するためには、現地において複数のハマル語話者に調査の協力を依頼し、どこまでが個人差によるもので、どこからがより共通性のある体系（ラング）であるかを探し出す必要がある。第二に、もし個人差でないとするならば、先行研究が出版されて約 30 年の間に、音韻変化が生じたか、あるいはその途中である可能性もある。特に、もしも音色による母音カテゴリが、母音の長さに取って代わられたのならば、それは文法体系にも大きな影響を及

[16]特に /ɦaː/ に関しては、調査協力者によれば、*/ʔaː/ とも /*haː/ とも発音されない。
[17]なお、本稿では扱わなかったが、文法体系はそれほど大きく異なってはいない。

ぼさずにはいられないだろう。言語の変化が何に由来し、どのように変化してくかを実証することは、共時言語学・通時言語学の両面に渡って極めて重要な作業となる。そのためにも、変化を被る前の言語の十分な記述が不可欠なのは言うまでもない。

また、本稿は調査者の聴覚印象に基づいて音素同定を行ったが、調査者の主観を免れ得ない部分があるのは避けられない。より正確な記述を目指し、音響分析に耐えうる広範な音声データの収集を行うことも、少数言語を対象としたフィールド調査では急務である。

【参照文献】

Lydall, J. 1976 "Hamar" In M.L. Bender (ed.) *The Non-Semitic Languages of Ethiopia.* Michigan: Michigan State University. 393-438.